

平成22年 5月10日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006年～2009年

課題番号：18320014

研究課題名（和文） 思想史的社会的史料としての科挙答案に関する基礎的研究

研究課題名（英文） A Basic Study of Civil Examination Papers as Historical Materials in the Pre-modern China

研究代表者 三浦 秀一 (MIURA SHUICHI)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：80190586

## 研究成果の概要（和文）：

本研究では、南宋から明末までの科挙答案に対し量的と質的との両面から分析をおこない、設問や答案といった特殊な史料からであっても、その時々を社会的・政治的・思想的な課題が反映されるような新たな事実を発掘することができることを示した。たとえば明朝の科挙においては、嘉靖年間以降、論題では『性理大全』巻六十五から六十九所収の一文からの出題が会試と郷試ともに増加し、一方、策題に関しては、とくに「性学策」の場合、元朝のそれを踏襲するような習慣的心性を克服する傾向が強まるのである。

## 研究成果の概要（英文）：

In this research, we conducted quantitative/qualitative analysis into civil examination papers in the pre-modern China and showed several instances that both questions and answers reflected the social, political and philosophical topics at each period. In the case of Ming dynasty provincial and metropolitan civil examination, it increased that discourse questions had been made mainly from *Great Collection of Works on Nature and Principle* vol. 65-69 since the Jiajing period, and it also intensified that policy questions and answers had been aimed partially to conquer the mentality which followed the form of questions in Yuan dynasty policy essays on the mind and nature.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
2007年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2008年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2009年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
総計	13,900,000	4,170,000	18,070,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学

キーワード：科挙・中国哲学・東洋史・登科録・四書・論題・策題・程文

## 1. 研究開始当初の背景

思想史学と社会史学それぞれの分野にお

ける先駆的な科挙関連の研究として、『四書大全』を始め明代後半に刊行された四書注に分析を加え、科挙と四書学との関連性を思想

史的に論じた佐野公治『四書学史の研究』（創文社、1988年）と、「登科録」等の史料を活用して近世中国における社会的流動性を解明した何炳棣 *The Ladder of Success in Imperial China* (Columbia Univ. Press, 1962年、寺田隆信・千種真一訳『科挙と近世中国社会』平凡社、1993年)とがある。ただし何著には、その研究の時期に由来する史料収集上の制約があるとともにその史料操作に対しても異論が出され、また佐野著はそもそも科挙文献それ自体を分析する研究ではない。その後、「登科録」類に関しては、その主要なものを集めた『明代登科録彙編』（全22冊、台湾学生書局、1969年）が編纂され、また中国国内の史料を閲覧することが比較的容易になるという研究環境の改善がみられた。そうした変化の恩恵を受け、綿密な史料調査と成熟した歴史学・社会学の理論とにもとづいて提出された研究が、Benjamin A. Elman, *A Cultural History of Civil Examinations in Late Imperial China* (California Univ. Press, 2000年)である。かくして科挙に関する社会史学・文化史学的研究は新たな段階に入り、中国では錢茂偉『国家、科挙与社会』（北京図書館出版社、2004年）が上梓された。

かかる情況下、本研究の分担者となる鶴成久章は、Elman 著の刊行に前後して「登科録」等への網羅的な調査をおこなうかたわら、佐野著の思想史的分析視角を深化させ、科挙の科目である「経義」に対し定量的な分析をすすめた。その過程において、Elman 著には文献史料の取り扱いにおいて粗雑な面が少なからず認められるとの問題を指摘した。同じく分担者の大野晃嗣は、科挙関連の史料を駆使して明清の官僚機構に対する研究をおこなう一方、26科分の「同年齒録」に関する書誌学的情報をまとめている。そして代表者の三浦は、『中国心学の稜線』（研文出版、2003年）中篇附論「元朝南人における科挙と朱子学」において、元代の科挙答案集である『皇元大科三場文選』（内閣文庫所蔵）を利用しつつ、その思想史的意義に言及し、2004年9月開催「公共哲学京都フォーラム東北会議」での報告「王者は天下を以て家と為す一 万曆二十九年会試の答案を読む一」では、科挙第二場の「論」の試験に対する幾つかの答案の読解と比較とを試みた。科挙の答案文を採録するうえで、元明の人士による挙業書や個人文集が大きな潜在的価値を備えていることを証したのである。本研究課題は、以上の諸成果をその出発点としている。

## 2. 研究の目的

隋唐以降、中国における官吏登用試験として継続的におこなわれた科挙が、たんに人材選抜の制度としてだけではなく、中国の政

治・社会・教育・文化等の諸分野とも相互に影響し合う国家統治上の「システム」として機能していたことは、周知の事柄である。さすればこそ、かかる統治システムとしての科挙が中国近世士大夫の心性や思想とも関連性をもつことは当然とみなせるのであり、本研究は、そうした関連性の具体的・全体的な解明を最終目標としつつも、まずは科挙に際してかれらが書き残した答案、および実際の答案や模擬的答案を集めた答案集を研究対象として、その網羅と整理とをおこない、さらにはそれらの文献に対し思想史的もしくは社会史的分析を試みることでその史料価値を確定させることを目的とする。

## 3. 研究の方法

四庫全書系列の大型叢書や、『天一閣藏明代科挙録選刊・登科録』および同『会試録』、『明代登科録彙編』を利用することにより、可能な限り多くの試録を統一的に取りまとめ、また個人文集からはそれらに散在する科挙答案を採集するとともに、以上の叢書に収録されない試録や挙業書、個人文集に関しては、日本国内の諸機関・中国や台湾の各図書館が収蔵する各種の刻本や抄本を調査し、蒐集につとめる。ただしその対象はメンバー各自の研究関心に応じておこなわれ、また史料の整理分析も各人が独自にすすめるが、ただしその結果に関しては、研究会の場において積極的に披露し合い、その精度の向上をはかる。

## 4. 研究成果

各種の科挙答案に対する量的分析から、とくに明代の論題と策題に関わる成果を得た。明朝一代をつうじて88回の会試が実施されたのだが、そのなかの85回分の論題が明らかになるとともに、その出題傾向について、嘉靖年間以降、『性理大全』巻六十五から六十九の一文を採用することが多いという現象を発見することができた。この傾向は郷試においてもほぼ同様であり、少なくとも論題における会試と郷試との類似性もあわせて実証できた。一方、策題に関しては、とくに「性学策」という類型に着目し、その出題内容が、元朝のそれを踏襲するところから始まり、そしてこの傾向が明人の心性に多大な影響をおよぼすのだが、しかしこの模倣する心性を克服する潮流がやはり嘉靖期以降に大きくなる、という全体的な趨勢を見いだすことができた。

答案に対する質的分析からは、科挙答案の同時代性ないし史料性を確認することができた。たとえば南宋の対策からは露骨な時の権力者へのおもねりを、元朝の対策からは自

然災害への短期的長期的両面の対処法などを知ることができ、また明朝の答案に関連しては、五経義の選択をめぐる地域的偏差と陽明学の成立との関連性や、模範答案を意味する「程文」を出題者が代作することの正負両面の意味とその時代背景を明らかにした。

以上の成果は、科挙研究それ自体として見た場合でも、従来指摘されてこなかった事象を新たに解明したという価値を備えるが、それとともに、中国近世の思想史や社会史の研究に対し異なる視角から実証的な知見を提供するという点でも貴重な意義を有すると判断できる。なお、如上の作業と平行して、当該時代の科挙に関する先行研究を一覧表にリストアップし、また重要な科挙文献に対しては解題の作業をおこなった。

成果の公開方法に関しては、その一部を各種の研究集会や学術雑誌において、口頭もしくは活字のかたちで示している。そのなかでも特筆したいのは、本研究課題に関わる研究者を中心メンバーとして応用科挙史学研究会を結成し、同研究会主催の研究集会を6回、ワークショップを3回開催した点である。これらの研究集会では、中国における科挙研究の第一人者である廈門大学劉海峰教授や書院研究の湖南大学鄧洪波教授・李兵副教授、台湾における宋代科挙史・社会史研究の気鋭である中央研究院歴史語言研究所陳雯怡助研究員を招いてその研究成果を聴くとともに、各氏とそれぞれに意見を交換した。また、2008年10月には、上記劉教授の推薦を得て、本研究課題に携わる4名の研究者が、中国天津で開催された「第四届科挙与科挙学学術研討会」に参加して報告し、その翌年8月の「第五届科挙与科挙学学術研討会」(札幌市)では、学会の開催を共同するとともに、本研究課題のメンバー全員が報告をおこなった。本研究課題の国際性が、年々上昇していることが看取されるであろう。

以下に応用科挙史学研究会の活動記録を附記する。ただしメンバーによる発表題目名は割愛した。

#### 研究集会

第1回「元明時代の科挙をめぐる諸問題」東北大学文学研究科 2006.9.21、鶴成久章・渡辺健哉

第2回「科挙文献の資料的意義」、東北大学文学研究科 2006.12.11、劉海峰(廈門大学)「科場試文的史料価値」・三浦秀一

第3回「官僚制度と書院教育」東北大学文学研究科 2006.12.13、鄧洪波(湖南大学岳麓書院)「聖化与規範：学規指導下的南宋書院教育制度」・大野晃嗣

第4回「金元時代の科挙から見た中心と周縁」東北大学文学研究科 2007.9.28、飯山知保(早稲田大学)「女真・モンゴル支配下華

北における科挙受験者数について」・渡辺健哉

第5回「科挙研究の新地平」東北大学文学研究科 2007.12.25、李兵(湖南大学岳麓書院)

「書院開放：書院發展的主要推動力」・大野晃嗣

第6回「宋明時代の科挙与思想史」東北大学文学研究科 2009.12.21、陳雯怡(中央研究院歴史語言研究所)「從「主司制」到「至公」之道：唐宋之際貢舉制度性質之轉換」・三浦秀一

#### ワークショップ

第1回「科挙制与科挙学研討会対策」東北大学文学研究科 2008.8.27、大野晃嗣・渡辺健哉・三浦秀一

第2回「科挙制与科挙学研討会対策」東北大学文学研究科 2009.4.1、渡辺健哉・三浦秀一

第3回「科挙制与科挙学研討会対策第二場」東北大学文学研究科 2009.7.11、大野晃嗣・熊本崇

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計13件)

(1)三浦秀一、明代科挙「性学策」史稿、『集刊東洋学』、査読あり、第103号、2010年5月刊行予定。

(2)鶴成久章、明代会試判卷標準考、『考試研究』(天津市教育招生考試院)、査読なし、第6巻・第1期、pp.92-108、2010年

(3)渡辺健哉、科挙制よりみた元の大都、『宋代中国』の相対化 宋代史研究会研究報告集第9集』、査読あり、pp.183-210、2009年

(4)鶴成久章、王守仁の白鹿洞書院石刻をめぐる、『陽明学』、査読なし、第20号、pp.83-103、2008年

(5)三浦秀一、王門朱得之の師説理解とその莊子注、『中国哲学』(北海道中国哲学会) 査読あり、第36号、pp.79-130、2008年

(6)鶴成久章、嘉靖二年会試の策題における陽明学批判について、『九州中国学会報』、査読あり、第45巻、pp.62-76、2007年

(7)鶴成久章、明代の科挙制度と朱子学、『中国—社会と文化』、査読あり、第22号、pp.44-59、2007年

(8)鶴成久章、明・張朝瑞撰『皇明貢舉考』の

資料価値について、『大阪市立大学東洋史論叢』、査読なし、別冊特別号、pp.135-147、2007年

(9)大野晃嗣、明代の「同年齒録」が語る進士とその子孫、『集刊東洋学』、査読あり、第98号、pp.63-81、2007年

(10)渡辺健哉、近年の元代科挙研究について、『集刊東洋学』、査読あり、第96号、pp.83-93、2006年

(11)鶴成久章、明代余姚の『礼記』学と王守仁、『東方学』、査読あり、第111輯、pp.123-137、2006年

(12)鶴成久章、論明代科挙中試「四書義」之出題、『科挙制的終結与科挙学的興起』(華中師範大学)、査読なし、pp.167-175、2006年

(13)大野晃嗣、明代の進士觀政制度に関する考察、『東北大学文学研究科研究年報』、査読なし、第56号、pp.87-128、2006年

〔学会発表〕(計27件)

●2009年度

(1)三浦秀一、再談策論的魅力、応用科挙史学研究会第6回研究集会、2009年12月21日、東北大学文学研究科

(2)三浦秀一、天一閣蔵明代科挙録選刊会試録試補、科挙文献研究報告研討会、2009年11月3日、廈門大学

(3)三浦秀一、明代科挙「性学策」史稿、第五屆科挙制与科挙学學術研討会、2009年8月27日、北海道大学

(4)鶴成久章、明代会試的判卷標準考、第五屆科挙制与科挙学學術研討会、2009年8月27日、北海道大学

(5)熊本 崇、宋紹興対策二種、第五屆科挙制与科挙学學術研討会、2009年8月27日、北海道大学

(6)大野晃嗣、從明代進士登科録編纂看明清考試文化中的官年現象、第五屆科挙制与科挙学學術研討会、2009年8月27日、北海道大学

(7)渡辺健哉、元代科挙礼儀小考—以《永樂大典》所引《經世大典》為線索—、第五屆科挙制与科挙学學術研討会、2009年8月27日、北海道大学

(8)鶴成久章、明代士人にとっての殿試の意味、

明清史夏合宿、2009年8月8日、一関市

(9)大野晃嗣、明代進士登科録編纂に関する一考察、応用科挙史学研究会第3回ワークショップ、2009年7月11日、東北大学文学研究科

(10)熊本 崇、宋紹興対策二種、応用科挙史学研究会第3回ワークショップ、2009年7月11日、東北大学文学研究科

(11)渡辺健哉、元代科挙儀礼小考、応用科挙史学研究会第2回ワークショップ、2009年4月1日、東北大学文学研究科

(12)三浦秀一、明代科挙策題初探、応用科挙史学研究会第2回ワークショップ、2009年4月1日、東北大学文学研究科

●2008年度

(13)鶴成久章、明代科挙と陽明学、東方学会第58回全国会員総会、2008年11月8日、京都市

(14)三浦秀一、明代科挙「程論」管窺、第四屆科挙制与科挙学研討会、2008年10月15日、中国天津市

(15)鶴成久章、可以托六尺之孤、第四屆科挙制与科挙学研討会、2008年10月14日、中国天津市

(16)大野晃嗣、明代「官年」現象的考察、第四屆科挙制与科挙学研討会、2008年10月14日、中国天津市

(17)渡辺健哉、關於元代科挙中の「策問」与「対策」、第四屆科挙制与科挙学研討会、2008年10月14日、中国天津市

(18)大野晃嗣、科挙名簿から見た明代の進士、応用科挙史学研究会第1回ワークショップ、2008年8月27日、東北大学文学研究科

(19)三浦秀一、明代の科挙における「程論」について、応用科挙史学研究会第1回ワークショップ、2008年8月27日、東北大学文学研究科

(20)渡辺健哉、元代の科挙における「策問」と「対策」、応用科挙史学研究会第1回ワークショップ、2008年8月27日、東北大学文学研究科

●2007年度

(21)大野晃嗣、明代の進士名簿：「同年齒録」の研究史とその課題、応用科挙史学研究会第

5回研究集会、2007年12月25日、東北大学  
文学研究科

(22)渡辺健哉、高麗人の見た元の大都：高麗  
出身進士の史料をてがかりに、応用科挙史学  
研究会第4回研究集会、2007年9月28日、  
東北大学文学研究科

●2006年度

(23)大野晃嗣、明代観政制度考、応用科挙史  
学研究会第3回研究集会、2006年12月13日、  
東北大学文学研究科

(24)三浦秀一、論策の魅力－明代思想史研究  
の立場から、応用科挙史学研究会第2回研究  
集会、2006年12月11日、東北大学文学研  
究科

(25)渡辺健哉、元代科挙研究の現状と課題、  
応用科挙史学研究会第1回研究集会、2006年  
9月21日、東北大学文学研究科

(26)鶴成久章、明代の科挙制度と朱子学、応  
用科挙史学研究会第1回研究集会、2006年9  
月21日、東北大学文学研究科

(27)鶴成久章、明代の科挙制度と朱子学、鶴  
成久章、中国社会文化学会、2006年7月9日、  
東京大学

〔図書〕(計0件)

6. 研究組織

(1)研究代表者

三浦 秀一 (MIURA SHUICHI)  
東北大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：80190586

(2)研究分担者

鶴成 久章 (TSURUNARI HISAAKI)  
福岡教育大学・教育学部・教授  
研究者番号：20294845

熊本 崇 (KUMAMOTO TAKASHI)  
東北大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：00153354

大野 晃嗣 (OONO KOUJI)  
東北大学・大学院文学研究科・准教授  
研究者番号：50396412

渡辺 健哉 (WATANABE KENYA)  
東北大学・大学院文学研究科・助教  
研究者番号：60419987

(3)連携研究者  
(0)

研究者番号：